



# 口演7：共用試験



07-1

## 共用試験医療面接課題の 問題点と効果的実習のあり方

### 東京SP研究会

佐伯晴子 中野一字 高草保 矢崎千栄子  
安原照雄 茂木恭彦 島幸弘 石川聖 谷口汎  
森本喜代治 近藤廉 千浦弘江 稲葉一樹 ほか

# 日本医学教育学会大会

## COI 開示

筆頭発表者名: 佐伯 晴子

演題発表に関連し、開示すべきCOI関係にある  
企業などはありません。



# 東京SP研究会について



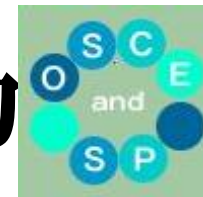
東京SP研究会は、患者と医療者との相互理解を深めることを目的に1995年4月設立。活動趣旨は患者と医療者の双方向コミュニケーションが成立し、患者の理解と納得の上で医療者との信頼を構築することである。

主に一般市民が中心となってSP (Simulated Patient 模倣患者) を養成・派遣し、医学部、歯学部、看護学部、薬学部、リハビリ学科などの卒前・卒後教育で、19年にわたり医療面接教育に参加してきた。所属SPは現在約40名。月2回の定例会で大学等との打合せや演技練習をおこなう。

2012年度に医学部14大学歯学部2大学の共用試験OSCEに協力した。また、5大学のAdvanced OSCEと、複数の専門医認定試験や研修医採用試験に協力し、課題シナリオの作成に参加した。



# 医療面接教育への期待とSPの目的



患者は早く元気になりたい、一人の人間として大切にされたい、自分の味方になって寄り添ってほしいと希望する。

コミュニケーションの基本は、医師と患者が互いに映しあう鏡として、一緒に歩いていく温かさで話を聴き、相手を思いやる心である。

医療面接教育でのSPの目的は、医療者が患者の疾患のみに注目するのではなく、疾患を持って生活している人間の気持ちに寄り沿った形で鑑別診断や治療を行える様にすることであり、そのためにも、まずは初対面の患者に対してより良きコミュニケーションが図れるように手助けすることにある。



# 共用OSCE対策実習の限界



その一方で、OSCEを目前に控えた実習で要求されることは、あくまで試験対策としての模擬患者であり、答え方に幾つかの約束事があるOSCE対策の実習では患者の気持ちにそぐわない質問であっても、答えざるを得ない場合が多い。この流れは、実習での採点方法や面接のフィードバックの流れにも影響を与える。このことにジレンマを感じているSPも多いのではないだろうか。

また、昨年の本学会で、コミュニケーションのズレを発表したが、医療面接実習が試験前に学生全員が体験するだけの表面的なもので終わっており、言葉の吟味まで深める余裕がないせいではないかと思われる。



# 効果的実習の提案①



・ OSCEは試験と割り切ってグループ毎に実習を実施し、  
（全員が画一的なセリフや型を習得できるよう、SPは繰り返し画一的な演技を行い、その範囲でフィードバックする）

→

その後全員の前で各グループの代表がそのシナリオで面接を行い、SPはSP本来の目的に沿ったFBを行う。画一的なセリフや型を超えた、人としての対応や医療者としての向きあい方と、患者の気持ちや、両者の信頼関係の様子に学生は多くのことを気づかされる。

この方式が、SP側の趣旨からしても学生にとっても、効果的な実習方法であると感じている。



# 効果的実習の提案②



## 実習を段階的にレベルを上げる

ある教員は、挨拶や患者に接する態度から始まり、次に鑑別診断に重点を置き、最後に病気の心配や生活の悩み等の患者の心情を汲み取ると言った具合に順を追った指導を行っており、それに従ったSPのFBを要求していた。

1グループ8名程度で1教室で、全員が面接者本人となり、且つ観察者の立場にもなる実習の場合、原則的に上記の順序に従って、出来ていた部分は褒め、見落としている部分や患者の立場として感じた部分をアドバイスのFBする過程を繰り返していく事により、学生・SP共にレベルアップを図っていくと言うこの方式を取り入れてみては如何だろうか。





# 効果的実習の提案③



- フィードバックの必要性

学生本人の感想、指導教員コメント SPフィードバック

一方的ではなく、3者間での会話ができるようにする

直後のフィードバック効果大 やる気と自信につながる

→ (試験でもフィードバックは有用では?)

文字(評価表)では伝えにくい

向きあって伝える重さと、学生の「わかった」の表情

- 学生が自分の面接を録画で見て自己評価する機会を





# 共用試験の改善



- 現状では、患者が抱えている病気の悩み事に関する質問も、（症状に関係のない）一般的な生活習慣に関する質問も、家族や血縁関係に関する質問も同列に扱われているのではないかと思われる。
- 実際の間診を考えた場合、質問の内容や方法、言葉遣いの柔らかさ、相手の気持ちをくんだ間の取り方等により患者の受け取り方も様々であり、答え方にも当然の様に違いがでてくるであろう。
- 患者の心情をくみ取ることが、結果として治療に必要な情報を得ることに繋がる事を学生に理解して貰うためにも、共用OSCEの設問毎の配点の改善が望まれる。



# 効果的実習の提案④



- 指導方法の標準化

指導理念の確認と進行手順の指針づくり

→公平に一定の学習効果を上げるための環境整備

- 事前にSP参加のFDを

(当会自主セミナーの利用と打合せ・協議)

- 教員とSPの対話による意思統一

- 繰り返し実習(6年、研修医、etc.)の奨励

画一的セリフと型(共用OSCE)

→自分の言葉で信頼関係構築&診断と治療